

日本植物園協会ナショナルコレクション申請書

新規申請

更新申請（認定番号 認定期間 年 月 日～ 年 月 日）
（いずれかに✓）

■申請年月日 2019年 12月 20日

■コレクションのテーマ

江戸時代の奇品植物

■申請団体・申請者名

浜崎大

■申請団体の代表者名（個人での申請の場合は不要）

■申請団体・申請者の連絡先（住所、電話、メールアドレス）

非公開

■コレクションの所在地（コレクションが分散している場合は主たる所在地）

非公開

■現地審査希望時期 日曜日希望。平日・土曜日不可。

年 月 日 ～ 年 月 日

希望する理由： 会社員のため

■コレクションのテーマ

江戸時代の奇品植物

■コレクションの概要

奇品園芸は、奇品家と呼ばれる好事家の目を通して選ばれた、斑入り・葉変わりなど自然に現れた「葉」の変異に美と希少性を見出す鉢植え文化で、江戸中期の江戸ではじまり、幕末のころまでつづいた。「奇品」とは「変わりもの」をさし、花の美しさを愛でる園芸や人間が自分好みに手を加えて育てる盆栽とは異なる、独創的な園芸文化である。

江戸時代の奇品植物は、近代の古典園芸植物のもとになり、幕末に日本を訪れたシーボルトやフォーチュンらによって欧米に伝わって、ヤツデやユキノシタなどの斑入り品種やヒヨクヒバやチャボヒバのような異形針葉樹が英国をはじめ海外の庭園にも普及することになった。

1986年ごろ、中尾佐助著『花と木の文化史』に「日本文化の生き証人」として掲載された古典園芸植物のマツバランやヤブコウジなどに興味をもったことが奇品園芸の研究に取り組む最初の動機である。

奇品植物は、オモトやマツバランなどの古典園芸植物やツバキ、サクラ、ツツジなどの日本発祥の園芸植物のような体系的なコレクションが行われることがほとんどなく、忘れられた品種になっているものが多かったことから、2000年ごろから本格的なコレクションを開始し、現在、39品種を保存している。

奇品植物は、おもに埼玉県川口市内の鉢物・盆栽生産者が共同で生産物を販売する売店や園芸会社などから導入した。現存する奇品植物の中には、南天‘筏’のように江戸時代とほぼ同じ品種名のまま栽培されているものもあるが、明治以降、別の品種名がつけられたものや品種名不明のまま栽培されているものも多い。江戸時代と明治以降の国内外の文献を用いて同定をおこない、類似品種がある場合は、葉形・斑・その他特性を比較して同定をおこなった。このように同定した本コレクションは江戸時代の奇品植物の生きたリファレンスとなりうるものであると確信している。

奇品植物の同定は、繁亭金太(はんていきんた)編『草木奇品家雅見(そうもくきひんかのみ)』(1827)と水野忠暁(みずのただとし)著『草木錦葉集(そうもくきんようしゅう)』(1829)を主な典拠とし、篠常五郎(しのつねごろう)編『萬年青図譜(おもとずふ)』(1885)、石井勇義著『原色萬年青図譜』(1934)、石井勇義著『原色園芸植物図譜(増訂改版)』(1942)、中井猛之進著『日本樹木誌(やまたちばな科)』(1943)、上原敬二著『樹木大図説』(1961)、岩佐亮二監修・芦田潔ら執筆『草木奇品家雅見解説』(1976)、塚本洋太郎監修・北村四郎校閲『草木錦葉集・解説』(1977)、Humphrey Welch and Gordon Haddow 『The World Checklist of Conifers』(1993)、Ronald Houtman 『Variegated Tree and Shrubs』(2004)などの文献を参考にした。

■申請者が保有するコレクションの種数、品種数、個体数（保有植物リストおよび写真は、別紙「保有植物リスト・写真ファイル作成要領」にしたがい提出）

奇品植物 39 品種を保有。詳細は「保有植物リスト」に記載。

1 品種につき親株最低 1 鉢保有し、増殖した若い株を複数株保有するものもある。

江戸時代の奇品植物の品種名は、持ち主・出所の名称に植物名を組み合わせ、〇〇出△△檜のように命名されることが多い。出所と持ち主の名は奇品植物の品種の由来をあらわすので奇品園芸にとって重要なキーワードであるため、できるだけ江戸時代の原典に即した品種名(植物の種名も)を使用すべきであるが、江戸時代の植物名・品種名には漢字とかな(変体仮名)が用いられており、ほぼ同じ時期に出版された『草木奇品家雅見』と『草木錦葉集』をみても、同じ品種の品種名や「かな」表記が異なっている場合があり、正名がわからないことも多い。当コレクションでは、初出の品種名と現在使用されている園芸名を「保有植物リスト」の備考欄に記載した。

■申請するコレクションのこれまで報告されている総数と申請者が保有する数

重複している品種も含めて『草木奇品家雅見』に掲載されている約 500 品種のうち 18 品種、『草木錦葉集』に掲載されている約 1000 品種のうち 25 品種を保有している。現存する品種は推定 100 品種ぐらいであろうと考えているが、今後、新たに見出した品種をコレクションに加えていくつもりである。

■コレクションの栽培管理状況（所在地が分散している場合は、ここに全てを列記）

雨・風や直射日光が当たると葉に傷みが生じるので、無加温のガラス温室で遮光ネットを使用して栽培管理をおこなっている。

江戸時代の奇品園芸で使用された植木鉢(白罌・黒罌・染付・瑠璃など)にできるだけ近い植木鉢を使用して鉢植えで栽培をおこなっている。

灌水は水道水で、一旦温室内の水甕に貯めて水温と水質を調整してから銅製の如雨露で 1 鉢ずつ丁寧におこなっている。

■コレクションの導入記録及びデータベース化の状況

記録はデジタルファイルと紙ベースの両方で備えている。

■コレクションのラベル表記状況（栽培管理用ラベルや展示用サイン・ラベルなど）

1 鉢ごとに品種名を記載した木製のラベルをつけている。

■コレクションへの協力団体・協力者（種名の同定、導入など）

所属する「伝統園芸研究会」会長の田中孝幸先生はじめ会員のみなさまから品種の同定の協力を得ている。

種苗会社に勤務しているため植物の導入は山野草や花木の生産者からの購入が多い。

■コレクションの長期保存のための方策と体制（増殖、栽培管理上の工夫、栽培技術者や後継者の育成、危険分散等）

奇品植物は鉢植えで栽培するのが基本で、植物と鉢とのバランス・全体の大きさは大切な要素となってくるので、老化した株の枯死に備えると共に大きくなりすぎた株の更新も大切なため、できるだけ複数株を保有している。

増殖は栄養繁殖（さし木や接木）による。

奇品植物のコレクションの後継者の育成は今後の課題である。将来的には博物館や植物園など公共施設や研究機関での永続的な保存を望んでいる。

■コレクションの公開の現状と今後の方針、これまでの広報・利用実績（研究等を含む）

コレクションは原則非公開だが、事前に連絡をもらい都合があれば公開するというのであれば対応可能である。

コレクションを使って以下の著書を発表した。

浜崎大 著 『江戸奇品解題』（2012年・幻冬舎ルネッサンス刊）
斑入り・葉変わり、奇品園芸の歴史と文化。

浜崎大 著 『江戸奇品図鑑』（2013年・幻冬舎ルネッサンス刊）
奇品植物 178 品種の特徴・由来。

浜崎大 著 『江戸奇品雑記』（2014年・幻冬舎ルネッサンス刊）
現存する奇品植物 24 品種の原色図版と特徴・由来。